

(2)輪島市立輪島中学校の取組

小川 正 (輪島市立輪島中学校 校長)

◆防災への取り組みを通して

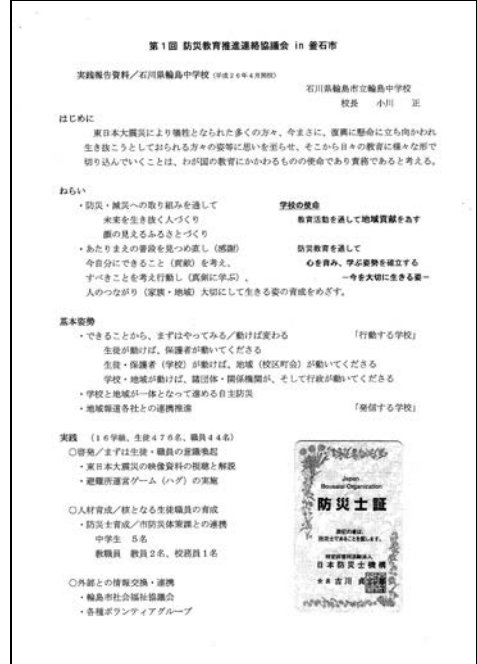
「未来を生き抜く人づくり」「顔の見えるふるさとづくり」
—学校と地域が一体となって進める自主防災—

3年前、校長として、能登小木中学校へ赴任し、防災への取り組みを始めなければという思いに至った経緯、取り組みを進めていく上での姿勢、そして本年4月から新たに赴任した輪島中学校での取り組みについてお話しさせていただきます。

3.11のその時、私は石川県奥能登教育事務所におりまして、一室で年度末の重要な業務打ち合わせの真っ只中でした。「なんか外が騒がしいな」というのが正直なところでした。皆のところへ戻り、初めてその事の大きさに気づかされました。大津波が田畑を飲み込んでゆく宮城沿岸部の様子がテレビに映っていました。「これはただ事ではない。」と思いました。

それから20日足らず、小木中学校に校長として赴任することとなりました。赴任するにあたり上司である教育事務所長から「今回の震災のことはどんな形でもいい、そのことを教育に活かしていくことは、日本の教育に携わる者にとって不可欠だ。」と励まされました。そして進めたのが、先ほど廣澤教諭より説明があった小木中学校における防災への取り組みであります。今、改めて思いますのは、ねらいや具体的計画は最初からしっかりとしたものではありませんでした。まずは思いついたことからやっつけていこう。ともかく動こう。この姿勢でまず自分自身も動き、職員に働きかけていきました。いくつかの取り組みを進める中で、生徒・職員・保護者・地域の皆さんの姿から感じ始めたことは、防災や減災の取り組みを通して、あたりまえの普段を見つめ直し、今自分にできること・なすべきことを考え行動すること、そして人のつながりを大切にして生きる姿の育成を目指すことが大事なのではということでした。

そこで、2年目からは、学校の使命を、「地域貢献」と掲げました。地域の活性化の原点は学校にある。様々な教育活動によって将来を担う人材を育成する。もって地域に貢献する。その一つのツールが防災教育であると捉えることにしたのです。学校は「防災教育を通して心を育み、学ぶ姿勢を確



立する」ことを目指すという姿勢に立つことにしたのです。

実は、小木中学校は 10 数年前までは生徒指導上の課題の大変多い学校の一つでした。小木は我が国有数のイカ釣り船の母港・港町。中校を卒業し半年航海行けば、数百万円というお金が入る。だから勉強するとか進学するとかっていうのはほとんど無縁な地区として、数十年続いた土地柄でした。校長として、確かな学力の育成の視点においては、お恥ずかしい限りですが、最初はともかく先が見ませんでした。そこで基本姿勢として、まずは「自分たちでできることから始めよう。」と思いました。したがって、当時の大句教頭（現小木中学校長）、廣澤教諭はじめ他の教員に「できることからまずやっ払いこう。」「こじつけといわれても構わない。見方をちょっと変えて考えよう。」と促しました。他方、平素より、報道関係のみなさんの協力を得ることが非常に大事だと思っていましたので、各社に可能な限り学校教育活動等の計画や情報を提供させていただきました。取り組みの詳細は、小木中学校の事例を参照くださればと存じます。

そうして 3 年、本年 4 月からは、輪島中学校へ異動しました。輪島中学校は、輪島市内山間部の 1 校、漆器産業・商業地区、水産業地区にあった 2 校の計 3 校が統合し、生徒数 477 名で 4 月に開校したばかりです。能登半島地震を経験しましたが、ほとんど防災についての関心や意識はありませんでした。そこでまずできることから、きっかけづくりということで、避難所運営ゲームを 2 年生 160 人でやらせてもらいました。半分は、東日本大震災の状況を仙台放送さんがまとめた映像を視聴させて自分が解説し、半分は輪島市社会福祉協議会のみなさんに避難場所運営ゲームを指導していただく形をとり、2 交代でやりました。これを、新聞 2 社が取り上げてくれました。それから小木中学校でもそうなのですが、防災についてまずは、教職員に関心や意識を持ってもらうために、防災士の資格取得に挑戦してもらいました。私も小木中在任中に取得しました。教諭、校務員の計 3 名を、養成講習に参加させ資格取得してもらいました。石川県の場合は、約 4 万の経費を県と市町が半々で援助してくれる制度があります。ちなみに今、小木地区では教職員・保護者・地域の皆さん等で、防災士が十数名を数えています。本年、輪島では、市長さんから中高生の防災士養成の予算を応援していただけることになり、本校生徒 5 名はじめ市内 3 校で中学生 8 名、高校生 5 名が、地域の人たちに交じって防災士の資



格を取得しました。こういった話題をとにかく発信して、少しでも関心を持ってもらうことが、防災・津波避難等々の意識を高めていくきっかけになるのではないかと考えているからです。

私が今一番思っていることは、学校外といかにつないでいくかということです。小木中学校に3年間おりましたが、活動に利用したハザードマップなどは、学校では用意できませんので、役場の土木課へ行って、都市計画の図面をもらってきました。防災の取り組み・PR活動を進めるために近隣の保・小・中・高校、地域区長会、商店連盟、危機対策はじめ総務・企画・財政・ふるさと振興課、商工会、県庁、報道各社、海上保安庁、自衛隊等々いろんなところをまわっていたことを思い出します。あの手この手で支援や協力をいただいていたように思います。避難所用間仕切り段ボールは、自分で県の危機対策課に行き、トラックで借りてきました。その時に最初に言われたのは、「町役場さんから一報いただければいくらでもお貸しします。」とのこと。それで町役場へ行き、事の次第をお話し、協力をお願いしました。また、防災訓練を行うにあたり県の危機対策課の方に視察・指導助言（避難所間仕切り設営のノウハウ等は県の方しか持ち合わせておられなかったの。）に来ていただけないでしょうかとお願いしました。県の危機対策課の方が来ていただけたということで、今度は県教育委員会・防災教育担当の方へもお声掛けしました。（いずれの方も手弁当でおこしくございました。）学校が動いたら地域の方が動いてくださいました。地域が動いたら、海上保安庁さんがヘリや艦船で協力してくださいました。そうした動きの中で町役場や県・行政の皆さんが関心を持ち・支援してくださいました。自衛隊さんも防災教育の一環として、炊き出しの部隊を連れて協力してくださいました。そうすると、行政の皆さんもこれまで以上に関心を示していただきました。学校が動いていくことによって、いろんな方々が手を差し伸べてくれました。学校・PTAが地域と行政の間に入り、地域自主防災組織を立ち上げることができました。「どどこがすべき」とか、そういうことではなくて、どこでもいいから動けるところから動いていけば、自然と集まってきていただけると実感しております。校長として何より嬉しかったことは、先生方の発想が非常に創造的となり、よく行動してくださるので、生徒も「自分たちも馬鹿やっている場合じゃない。」と真剣に授業に向かっていくようになりました。「真剣に学ぶ姿、自分達のできることを考え・判断し行動する姿は、上級生の姿を手本に。」といった校風・伝統が生まれ、引き継がれ始めています。学力も確実に向上してきています。伸び率で言えば県内トップクラスとなっています。また、マスコミのみなさんが協力していただいたことは、地域の活性化に大きな力になっていると思います。町の広報誌・ケーブルテレビ、新聞やテレビ報道されるということは生徒、保護者、地域の皆さんにとっては大変な励みになっていると思います。何より地域に明るい話題ができました。

いずれにしても学校ですので、防災の技術面だけではなくて、防災の取り組みを通して心をどう育んでいくのか、どのような生徒の姿をめざしていくのが重要であると考えます。ふるさとづくりにもおおいにつながっていきます。そういった意味では、生徒たちが今を大事に真剣に学んでいこうとするときに、東北の生徒たちの言葉が生きたと思います。「あたりまえがあたりまえでなくなったとき、もう一度そのあたりまえをとりもどすのが僕たちのあゆむ道。」「自然はあまりにも大切なものを奪った。それでもわれは天を恨まず。」等々、中学生が発信した言葉の一つひとつを生徒に投げかけたときに、普段は体が揺れがちな生徒も、じっと聞いていてくれる姿、くいいるような視線を今も覚えています。これからも少しずつですが、「できるところからまずはやる」、「どどこがすべき、これはこうあるべきとかそういう考え方は、まずは隅においておき、動けるところが動く。」自分が動き、教職員・生徒が動けば、保護者・地域が動く。学校・地域が動けば、教育委員会はじめ行政・関係機関も関心を持ち、支援・助言の手を差し伸べてくださる。「動けば変わる、動き出す。」防災教育・防災への取り組

みは、教職員の創造性を高め、生徒にふるさと理解と自己有用感を育み、学校と地域をつなぐといった、まさしく未来を生き抜く力を育む大切なものであると確信しています。「地域からひとりの犠牲者もだしたくない。」一人の女子生徒のこの言葉から始まった小木での地域とともに進める防災への取り組み。少しずつではありますが、輪島でも、小木と連携させていただきながら進めてまいりたいと思います。東北はもとより、あまたの災害で犠牲となられた方々、今、まさに懸命に立ち上がらんと努力なされている方々の姿に思いをいたらせ、そのことを日々の教育にいかしていくことは、今を生かされ、教育に携わるものの使命ではないでしょうか。

このような貴重な機会を与えて下さった片田先生はじめ関係者の皆様、そして東北・釜石の皆様の姿に心より感謝と御礼を申し上げます。